

「ジャーナリストの会」発足

千野鏡子 (産経新聞外信部長)

「フルブライト・ジャーナリストの会」は去る3月23日夜、東京・有楽町の外国特派員協会で第2回目の集いを開いた。あいにく3日前に起きた地下鉄サリン事件のため、予定していた若手記者の顔ぶれが少なかったのはちょっと残念だったが、「往年の若手記者」(失礼)が多数、姿を見せて老若の談論風発も盛り上がり、幹事団はやれやれと胸をなでおろした。

同会発足は実は長年、日米教育委員会事務局長を務められたカロライン・野野・ヤンさんに負っている。ヤンさんが昨年3月退任されるという話を知って、J・プログラム(ジャーナリスト・プログラム)によるフルブライトの有志何人かが、誰からともなく「お世話になったヤンさんにぜひとも感謝の夕べを開こう」となり、それが一気に「ジャーナリストの会」旗揚げにまで至ったのだ。忘れもしない昨年4月27日、時刻も所も同じ外国特派員協会だった。いや、もう少し発足の舞台裏を明かせば、同窓会の集まりは大先輩ばかりなので、ここはひとつ同業者や知った者同士で集まりを……と

いう気持ちもあったようだ。

1972年から始まったJ・プログラムによるフルブライトはその時点で57人。特派員などで海外赴任中の人も少なくないので30人余りの出席率は上々で、幹事団は「やっぱり会の発足が待たれていたんだ!」と手前みそでナツク。この夜の主役ヤンさんも「実は私も高校では編集長でした」と連帯の挨拶をくださった。

さて2回目の今年は日程の都合でヤンさんのご出席は実現しなかったものの、シェパード事務局長以下事務局の皆様が昨年に続いてご出席。一同、フルブライト奨学金の近況に耳を傾けた。また参加者が新たにジャーナリストとしてフルブライトに参加した方々にも広げられ、会合の輪が一層大きくなった。

今後の会の運営については勉強会を、日米ジャーナリストのシンポジウムを……など参加者の意見はいろいろだが、最初からあまり無理をすると長続きしない。ここは一步一步と、まずは次回幹事にJ・プログラム一期生の信原尚武さんを選出。早くも3回目実現に向けて想を練ると同時にボランティア幹事を募集中ですのでよろしく!

事務局便り

94年度に同窓会員に対して行いました「同窓会に関するアンケート」の結果の概要につきましては別掲しました。

このアンケートの回答の中に、「同窓会は同窓会員に何をしてくれているのか」、「同窓会は今のよう活動ばかりでなく(今のよう活動よりも)、同窓会会員のための活動をやらせたらどうか(やってほしい、やるべきだ)」という主旨の意見が見られました。

実は私自身も全く同意見です。フルブライト同窓会は大学の同窓会等と似たような性格の団体ですから、先ず何よりも会員相互の交流と親睦を計るべきだと思います。ところが今の同窓会が実際に一番一生懸命にやっているのは、日米教育委員会に協力して、フルブライトプログラムを維持発展させることなのです。一方では毎年奨学生のために一億円位の募金活動をしたり、来日アメリカ人奨学生のためにはいろいろな行事を行ったりしているのですが、他方では会員名簿さえ過去9年間発行していません。

フルブライトプログラムを維持発展させること自体は、同窓会活動の対象として異論を唱えるべきものではありませんが、もっと会員のためのことも考えるべきだと思います。

事務局のお前がそれをわかっているのなら、なぜそうしないのだ、とおっしゃられると思いますが、実はこれには過去の歴史が関係していることをご理解下さい。

その歴史は同窓会が出来た過去10年程前に遡ります。前任の日米教育委員会の事務局長は大変有能で活動的な人で、自己の仕事

であるフルブライトプログラムの発展に一生懸命でした。そのアイデアの一つとして思いついたのが、フルブライト同窓会を作ってフルブライトプログラムの発展のために同窓会に協力してもらおうということだったのです。そして、なるべく社会的に通りの良さそうな人たちに声をかけ、声をかけられた人のなかで賛同した人が他の人にも呼びかけて同窓会が出来上がったのです。ざっくりいえば、同窓会は同窓生のために作られたとはいえないのです。

私は3年近く前、お金儲けを考えることに飽きていたところに、同窓会事務局長を探していることを知って参画することになりました。先に申しましたように、私は同窓会を第一義的に同窓生のためにあるべきだと考えています。しかし歴史もあることでそれなりのしがらみもあり、物事を急に変えようとするのは摩擦も生じますので、それを避けながら徐々に、もっと会員の方に顔を向けた同窓会にしていくようにと、私なりに努力しています。皆様のご支援をお願いします。

今後はなるべく早く名簿を発行し、中断している会員のためのセミナーを復活し、年度別はもちろん、分野別の同窓会等を活発にさせていきたいと思ひます。また、このニュースレターは今のところ年1回発行させるのがやっとですので、中間に1回、もっと簡単な事務局便りを、ニュースといっしょに、会員アンケートでも希望の多かった会員の消息を中心に、発行することも考えています。また、パソコン通信に同窓会のニュース欄を作ることも企画中です。(事務局 加藤弓弦)



TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION
ガリオア・フルブライト東京同窓会

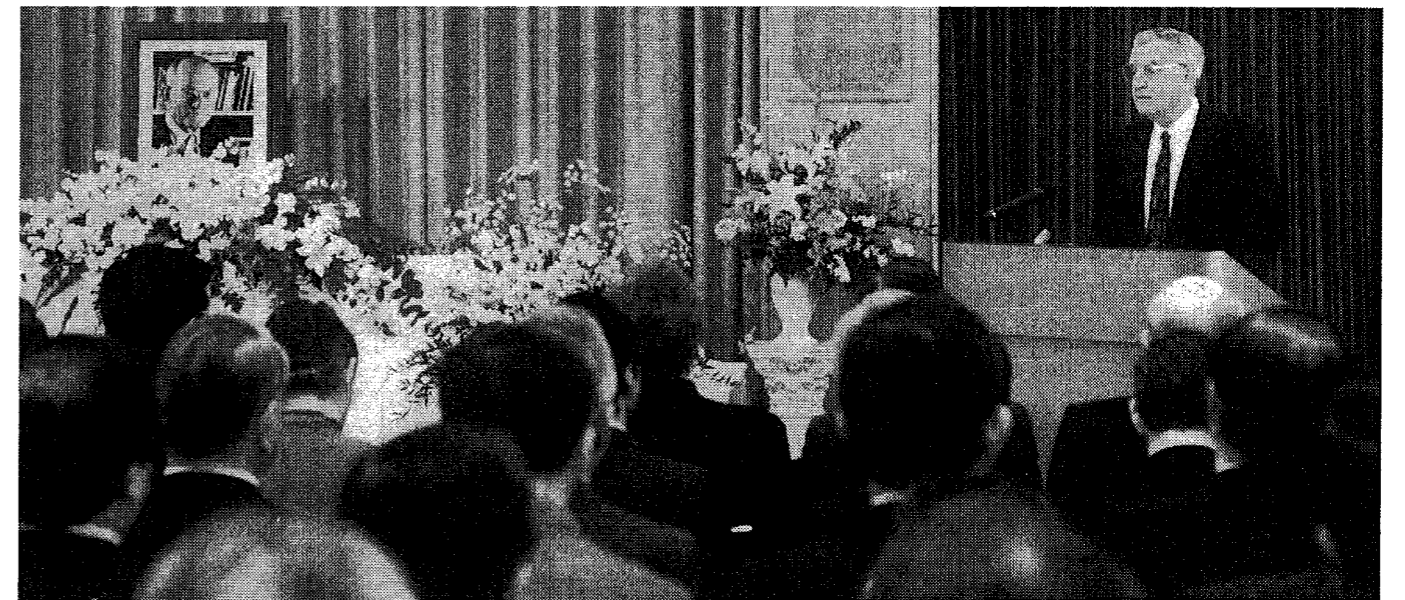
NEWSLETTER

No. 8

NOVEMBER 1995

フルブライト氏逝去 遺徳を偲んで献花式

フルブライト氏を祈念する献花式が、フルブライト同窓会の主催で2月23日、東京・麻布の国際文化会館で行われた。与謝野馨文部大臣、モンデール駐日大使をはじめ、同窓生、フルブライトプログラム関係者約300名が参列、モンデール大使ほか数名が弔辞を述べた。最後に同窓会を代表して行天豊雄会長がスピーチし、フルブライト夫人から同窓会会員に寄せられたメッセージを読み上げた。



フルブライト氏の遺影の前に弔辞を述べるモンデール駐日アメリカ大使(2月23日、東京・麻布の国際文化会館で)

歴史的な貢献に心からの敬意

行天豊雄同窓会長の追悼の言葉(要旨)

私どもフルブライトとして留学をさせていただいた者にとりまして、アメリカでの留学の体験というものはそれぞれの人生のなかで非常に大きな足跡を残しております。

留学で何を得てきたかにつきましては一人一人さまざまだと思います。アメリカとかアメリカ人を知ることができたという人、あるいはアメリカという世界的な指導国家で暮らすことによって世界を知ることができたと思う人、日本を離れて若い目で自分の祖国を振り返ることで祖国をよりよく知れたという人……。共通しているのは恵まれた環境で学問するということがいかに貴重なことであるかという思いでありましょう。そのほかにも留学中に生涯のよき伴侶を見つけられ

た方も多くいらした。

いずれにしましても、私たちが多感な青春の一時期、さまざまな貴重な体験をすることができたのはまさにフルブライトさんのおかげです。その意味で、ほんとうにお礼を申し上げたい。と同時に、世界中の若い人たちに貴重な体験をさせるということがまさに人類の進歩のための、小さいかもしれないけれど貴重なステップであるということに洞察され、その実現のために辛い長い努力をなされた。その歴史的な貢献に対して、私どもは心からの敬意を表するものであります。

こういうフルブライトさんの功績にわれわれが応えることができるのであれば、それは同じように私たちが世界の若い人たちに貴重な体験をしてもらう。できればそれを日本でもしてもらおうということが、フルブライトさんの志に最もよく応える途ではないかと思ひます。

フルブライト夫人のメッセージ

献花式にちなんでフルブライト夫人から日本の同窓会会員にメッセージが寄せられました。以下にその全文を掲載します。

J. William Fulbright Memorial Service
of the
Japanese Fulbright Alumni Association
Tokyo, Japan
23 February 1995

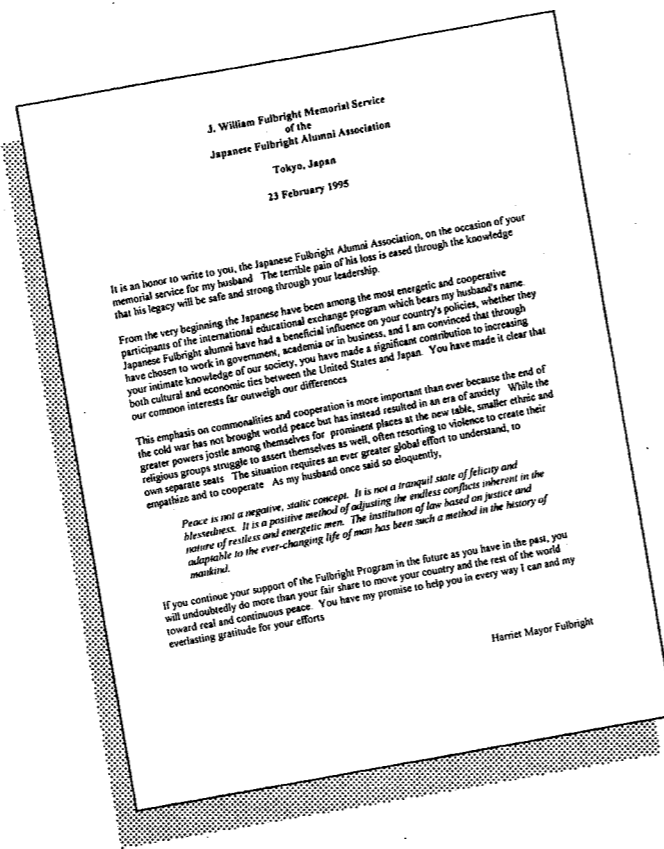
It is an honor to write to you, the Japanese Fulbright Alumni Association, on the occasion of your memorial service for my husband. The terrible pain of his loss is eased through the knowledge that his legacy will be safe and strong through your leadership.

From the very beginning the Japanese have been among the most energetic and cooperative participants of the international educational exchange program which bears my husband's name. Japanese Fulbright alumni have had a beneficial influence on your country's policies, whether they have chosen to work in government, academia or in business, and I am convinced that through your intimate knowledge of our society, you have made a significant contribution to increasing both cultural and economic ties between the United States and Japan. You have made it clear that our common interests far outweigh our differences.

This emphasis on commonalities and cooperation is more important than ever because the end of the cold war has not brought world peace but has instead resulted in an era of anxiety. While the greater powers jostle among themselves for prominent places at the new table, smaller ethnic and religious groups struggle to assert themselves as well, often resorting to violence to create their own separate seats. The situation requires an ever greater global effort to understand, to empathize and to cooperate. As my husband once said so eloquently,

Peace is not a negative, static concept. It is not a tranquil state of felicity and blessedness. It is a positive method of adjusting the endless conflicts inherent in the nature of restless and energetic men. The institution of law based on justice and adaptable to the ever-changing life of man has been such a method in the history of mankind.

If you continue your support of the Fulbright Program in the future as you have in the past, you will undoubtedly



フルブライト夫人から同窓会会員に宛てられたメッセージ

do more than your fair share to move your country and the rest of the world toward real and continuous peace. You have my promise to help you in every way I can and my everlasting gratitude for your efforts.

Harriet Mayor Fulbright

心に刻まれた「偉大な政治家」の姿

我謝京子（テレビ東京記者）

「広島、長崎の原爆投下がきっかけとなって、奨学制度を創ったんだ」――フルブライト氏は生前テレビのインタビューで元気に答えていた。そして投下から50年、戦後50年目の今年にフルブライト氏は亡くなった。

どの新聞もその日、氏の死亡記事を書いたがどれも小さなものだった。もう彼は過去の人なのだろうか、それを見極めるため私は特集番組をつくることに決めた。その最初の取材が献花式だった。取材を進めるうちに彼は過去の人ではないという確信が深まっていった。なぜなら献花式につめかけた同窓生全ての顔は若者に戻っていたからだ。第1期からの同窓生からだから熟年の方々が多かったが、献花する瞬間、そして人々のスピーチに耳を傾けているとき彼らの顔は若く素直だった。それぞれの頭の中には、あのかげがないアメリカでの青春が甦り、フルブライト氏への感謝の気持ちでいっぱいになっていくのが手にとるようにわかった。

献花式の前後には参加者の声を拾った。モンデール駐日大使は、「私は彼の下で10年近く働いたが、彼こそがアメリカの最も偉大な政治家だった」と言い切り、同窓生の吉田レイ子さんは「あのフルブライト体験がなければいまの私はなかった」としみじみ語った。私はこの時改めてこの一人のアメリカ政治家の影響力の大きさに圧倒された。と同時に、アメリカでの原爆切手の発行中止や、スミソニアンでの原爆展の中止など、戦後50周年で日米関係がぎくしゃくするなか、まだまだ傲を飛ばし続けていただきたかったと悔やまれる。

クリントン大統領の献辞に感銘

川村茂邦（前ガリオア・フルブライト同窓会全国理事長）

「アメリカならびに世界をとわに前進せしめた彼の生涯を祝福し、感謝するために我々は本日ここに集うた。…彼は我々の時代におけるジェファーソンの相続人であった。…彼はしばしば世の大勢に抗し、時にはその政治的な生命をかけて、20世紀の最も破壊的な力に抗し、最も明るい希望の前進に向けて闘ったのである」

これは去る2月17日、ワシントン・ナショナル大教会において催されたフルブライト上院議員の葬儀（メモリアルサービス）においてクリントン大統領がおこなった献辞の冒頭の一節である。

私は、日本フルブライト同窓会の会長である行天豊雄氏（東京銀行会長）のたつての依頼もあり、この葬儀に同窓会を代表する形で参列したが、日本からの参列者は私一人、日本人の参列者は私のほか栗山駐米大使ご夫妻、田中信正ニューヨーク日本フルブライト同窓会会長だけであったと思う。

およそ1時間半にわたったこの式典は、大変荘重、厳粛なものであったが、最も印象深かったのは、やはりフルブライト上院議員と極めて親しく、その人となりを知悉しているクリントン大統領（新聞にはフルブライト上院議員は1960年代

本間長世氏をゲストに1995年度総会

加藤弓弦（同窓会事務局長）

ガリオア・フルブライト東京同窓会の1995年度総会が4月20日、東京・新宿のヒルトンホテルに約110名の同窓生及び家族が参加して開かれた。

総会議事では行天豊雄会長の挨拶、小西輝明副会長の同窓会募金報告、加藤弓弦事務局長の会務・会計報告が行われた。

その後本間長世氏（1954-1964フルブライター、成城学園長、前国際交流基金日米センター所長）が「フルブライト・

における彼のモニターであったとの評もあった）の献辞であった。クリントン大統領は、フルブライト上院議員の卓越した信念と貢献の核心を冒頭のごとく表現し、32年間に及ぶ議員、上院議員、さらには上院外交委員会の委員長として、世界の進歩と平和を希求しつづけたフルブライト上院議員の揺るぎない信念と行動を称えた後、その具体的な貢献の事例として、国連の創設への尽力、マッカーシズムやベトナム戦争、核兵器の拡散などへの反対をあげる一方、フルブライト留学制度の創設にふれ、この多くの成果を紹介し、彼の最も大きな遺産としてこれが生き続くであろうと述べた。

我々フルブライターにとって大変感銘深いものであるが、さらに後段における「我々ならびに我々の国は彼に多くのものを負っていることを忘れてはならない」とのクリントン大統領の呼び掛けは、ことに胸に残るものであった。

葬儀の後、別館のハーストホールで行われたご遺族の集まりに私も出席し、ハリエット未亡人に親しく弔意を表することができ、またクリントン大統領にも挨拶することができたことも幸いであった。私が献辞がすばらしかったと挨拶したのに対し、クリントン大統領は、いかにも若々しいアメリカの大統領らしく「有難う」とガッツポーズで握手の手を差し出したのであった。

フルブライト上院議員に多くのものを負っているフルブライターの一人として、ここに重ねて彼のご冥福を心から祈念するとともに、この留学制度がさらに大きく発展し、彼の大いなる遺産がさらに高まらんことを念願して、ご報告を終わりたい。

追記 去る2月23日、国際文化会館において行われたフルブライト上院議員の日本におけるメモリアルサービスにおいて、私はワシントンポスト誌にフルブライト上院議員の葬儀に関する記事がなかった旨ご報告したが、グレン福島氏のご案内により同誌のスタイル欄に記事が掲載されていたことが判明したので、ここに訂正します。

プログラムの成果と日米文化交流の将来」という演題で講演された。

本間氏は、まず戦後50年をへた現在でもなお、一般レベルでの日米の相互理解は不十分であることを指摘。にもかかわらず、たとえば「脱米入亜」といったスローガンに象徴されるような非生産的な考え方が現れている、と憂慮し、むしろ日本とアメリカが互いに手を取り合って、アジア・太平洋と

いう舞台で21世紀の世界のために何ができるのかを構想すべきである。そのためには、いかに世界的な情報化の時代になるうとも、人と人の交流がいっそう重要性を増す、と述べられた。

講演会後ブフェスタイルの懇親会が行われた。毎年のマ

ンネリを脱却し、1994年度懇親会の不評を挽回しようという集会委員会の皆さんの努力のもと、会場もホテルへと一転しての企画は参会者の好評を得、午後8時半公式散会の後も午後9時まで会場に居残って歓談する会員が多かった。

1994/1995年度役員名簿

- 会長：行天豊雄
- 副会長：田中哲男（会長代行） 平野龍一 小西輝明
松原亘子 高澤廣茂 安成子 白鳥正喜
- Foundation Liaison委員長：堀江昭／担当副会長：小西輝明
- Alumni Meetings委員長：正野敏夫 副委員長：早川与志子／担当副会長：安成子
- Hospitality委員長：太田隆次 副委員長：三上紀史／担当副会長：高澤廣茂
- Publicity委員長：西岡一正／担当副会長：行天豊雄
- Administration事務局長：加藤弓弦／担当副会長：白鳥正喜
- 監査役：堀憲明

募金結果

●1993年度		●1994年度	
企業名等	金額 (万円)	企業名等	金額 (万円)
D I C	500	富士銀行	500
富士銀行	500	日本興業銀行	500
日本興業銀行	500	国際経済交流財団	1,600
国際経済交流財団	2,000	三菱グループ	500
三菱グループ	500	住友グループ	500
住友グループ	500	モービル石油	500
コマツ	500	トヨタ自動車	500
Y K K	1,000	Y K K	1,000
モービル石油	500	J P モルガン	50
カーギルジャパン	500	東京チャリティゴルフ	868
トヨタ自動車	500	40周年記念品残品販売	42
J P モルガン	50	フルブライト氏死去記念募金	518
東京チャリティゴルフ	945	個人寄付金	11
大阪チャリティゴルフ	291		
中部同窓会	5		
個人寄付金2	04		
合 計	8,495	合 計	7,089

(註) この表はそれぞれ、フルブライト財団が1994/95会計年度事業のために(原則として1993/94会計年度中に)受け取った寄付金の額を示します。しかし、実際には寄付者の都合で1993/94会計年度の前後に受け取っているものがありますので、1993/94年度経理上の寄付金額とは一致しません。

決算報告

●1993年度		●1994年度	
	金額 (円)		金額 (円)
収入の部			
前期繰越	7,241,683	会費	5,599,000
会費	5,078,000	寄付金	118,000
受取利息	88,346	受取利息	110,671
受取手数料	4,000,000	募金手数料	2,040,000
賃貸料	180,000	P C 賃貸料	240,000
雑収入	1,800	雑収入	3,600
当期収入合計(A)	8,111,271	当期収入合計(A)	8,111,271
前期繰越	10,456,119	前期繰越	10,456,119
収入合計(B)	18,567,390	収入合計(B)	18,567,390
支出の部			
給料手当	1,918,067	旅費交通費	109,040
会議費	86,840	通信費	1,382,125
会合費	243,709	印刷製本費	434,222
旅費交通費	312,980	交際費	31,510
通信費	776,292	什器備品	917,875
事務用品費	47,724	消耗品費	11,512
印刷製本費	340,374	地代家賃	213,000
什器備品	774,484	会合費	389,727
倉庫料	112,853	倉庫料	112,853
リース料	138,108	会費等	0
交際費*註	1,223,280	リース料	40,788
支払手数料	21,223	事務用品費	195,855
委託費	0	給料手当	2,701,918
雑費	137,776	奨学生費	296,245
次期繰越	10,456,119	支払手数料	12,392
註:フルブライト氏88歳誕生会		図書購入費	22,199
		会議費	38,792
		雑費	531,465
		予備費	0
		委託費	0
		当期支出合計(C)	7,441,518
		当期収支差額(A)-(C)	669,753
		次期繰越(B)-(C)	11,125,872

同窓会アンケート調査の結果から

安成子 (同窓会副会長)

1993年の総会準備をしている段階で、一度会員の意見を聞いたかどうかという意見が出され、役員会にアンケート調査の提案をしてから、予算手当については加藤事務局長、調査表の作成にあたっては久世、正野両氏と相談しながら、94年4月によく全会員にアンケートを送ることができました。

発送数は東京同窓会の会員3039名で、500名の方から回答をいただきました。回収率は16.5%です。アンケート提案者の一人として、回答いただいた方々に厚くお礼申し上げます。ニュースレターの誌面をお借りして、アンケート結果をフィードバックして皆様のご参考に供したいと思います。

まず同窓会活動に対する認識程度ですが、参加したことのある人は50%以下でした。総会の講演会には34%が参加したことがありました。これに対して、ニュースレターは96%が読んだことがあり、その評価も「良い」「まあまあ」が95%ときわめて高い評価を得ました。セミナー、懇親会は、昨今頻度が少ないこともあり、やっていることを知っている人が20%で評価もしにくいというところでした。

ホスピタリティー委員会は60%が知っていました。米国人グランティー歓迎会は31%が参加したことがあり、その人たちは援助する意志があるようです。さすがに募金活動はよく知られていて、60%が経験があります。会費については現状の3000円維持が多く、役員になる意志のある人は13%と少ないようです。名簿についてはかなり積極的で、少々費用がかかってほしいという声が80%近くありました。

今後の活動としては、現在事務局スタミナの制限から活動していないセミナー、講演などの希望が多くありました。同窓会活動全般については、「まあまあよい」が75%近くあり、この会費ならこの程度で満足というところかなと思いました。

現在の各委員会活動を行っていただくだけでも、ボランティア委員にはスタミナの負担が大きい状態であることから、フルブライト同窓会はイベント型より情報提供型にならざるをえないのかもしれませんが、あまり気張らずに、今までの活動を改善しながら安い会費で長続きさせることが現在の同窓会役員に課せられた努めかもしれないと感じた次第です。

今後とも皆様方のご意見をお待ちしています。

アンケート調査結果 項目別概要

●セミナー・講演会

総じて日米あるいは世界の政治、経済、文化に関連したテーマが望まれているようです。会の形式に分科会やパネル

形式を取り入れてみてはという意見もありました。講演者にはやはり著名なフルブライトの名前が数多く挙がりましたが、駐米大使経験者や女性、若い人にもとの声もあります。

●ニュースレター

ほとんどの人が Newsletter を読んでいるようですが内容に対する満足度は回答の集計結果の数字ほど高くないようです。高年齢の方からの回収が多かったためか、とくに同窓生の消息や活動状況、留学先大学の近況についての記事希望があります。また、同窓生からの投書、投稿記事を掲載する、支部活動や小グループ集会、年度別同窓会記事、海外のフルブライト活動などが目につきました。

●ボランティア活動

ホストファミリーなどは、生活にかかる負担が大きいようで、何らかの形で活動には参加したい気持はあるのだが現状は無理で申し訳ない、というのが実情のようです(家が狭過ぎる、遠隔地である、家族または自分が病気である、多忙である等)。役員になる意志はあるか、という問いに関してもほぼ同様のようです。

●同窓会費

既に一線から退いた会員からは現状維持を望む声が多岐にわたります。値上げ肯定の意見は、物価の上昇等を考えるとやむをえない、活動内容の充実度によっては値上げしてもいい、という条件があげられています。また会員の年齢別に会費を変えてはどうかという具体案もありました。

●同窓会名簿

名簿配布の有料・無料については有料でもいいという意見がほとんどですが、同窓会費を納めている人は無料にして納めていない人は有料にしてはという意見が複数ありました。また、名前と電話番号のみの簡易名簿(無料)と、住所や出身校等詳細ののせた名簿(有料)を作成してはどうかというのがあります。

●同窓会活動

今後増やして欲しい活動については複数にマークをする人が非常に多く、ほとんどの人が何らかの形でもっと活動を盛んにしてほしいと思っているようです。また年間活動予定を事前に配布、若年代会員への活動アピールも必要という意見もありました。世代や各人の現在の生活状況により、同窓会に対する今後の活動についてのアイデア・報告・意見その他では様々な回答がありました。

94年度米国人グランティー歓迎会

太田隆次 (ホスピタリティ委員会委員長)

1994年度米国人グランティー歓迎会が、Grantee やその家族、冠企業の方々、フルブライト委員会関係や事務局の方々、それに同窓会員など総計約130名が集まって、94年11月29日にK K Rホテル東京(旧竹橋会館)で開かれました。

歓迎会は浜田竜之介さん(1961年度Grantee)の日本語と英語のバイリンガルによる司会で、行天豊雄ガリオア・フルブライト東京同窓会会長、河東哲夫外務省文化交流部参事官、渡辺宏フルブライト財団理事長のそれぞれ心暖まる歓迎のスピーチがありました。

その後、立食パーティーに入り、自己紹介やら再会を喜び合う輪がそこかしこにでき、宴たけなわというところで司会の浜田さんの指名で、Samuel Shepherd フルブライト委員会事務局長による、この夜のメインゲストである米国人グランティー一同の紹介があり、出席者から盛んな拍手を浴びていました。

実は、同窓会員から、会場がマンネリ化している、場所が分かりにくい、などのご批判がありましたので、他の場所もいくつかあたってみた結果、交通の便、予算など総合して、今回はK K Rホテル東京にしましたが(前回は日本

工業倶楽部、前々回はK K Rホテル東京)、おかげさまでホテル側も努力していただき、料理もまずまずで雰囲気もよく、閉会の午後8時半を過ぎても9時頃まで多くの方が残っていましたが、これは今までに例のなかったということで、胸をなでおろした次第です。

終わりにりましたが、快く司会を引き受けて頂いた浜田さん、同窓会の加藤弓弦事務局長と新井さん、ご苦労さまでした。

グランティーの最高裁・国会見学

高澤廣茂 (ホスピタリティ担当副会長)

恒例となった、米国人グランティーの最高裁・国会見学が今年も5月15日に行われた。あいにくの雨にもかかわらず参加者は、グランティー12名に日米教育委員会のSamuel Shepherd 事務局長、同窓会の加藤弓弦事務局長らも加わり、総勢18名におよんだ。

最高裁ではまず午後1時30分にフルブライト留学経験のある千種秀夫裁判官を同裁判官室に表敬訪問した。同裁判官は、米国人グランティーたちの質問に懇切に答えられ、訪問は予定時間を超えて20分に及んだ。最後には同裁判官を囲んで記念撮影のうえ、退室したが、同裁判官のものや

わらかな応対に感銘した一同はすっかりリラックスした気分になり、出発から見学は成果のあがることが予想された。引き続き小会議室で英語のビデオによるわが国の裁判制度の紹介、英語による質疑応答、大法廷・小法廷、その他一般には公開されていない庁内の見学等が行われ、午後3時30分に退出、国会に向かった。

国会見学ではまず衆議院第二議員会館に同じくフルブライト留学経験者である津島雄二議員を表敬訪問した。

動議員の流暢な英語によるユーモアを交えた談話は、これに続く質疑応答とともに見学者一同をすっかり魅了し、昨今とかく風当たりの強い政治家に対するイメージアップにもなった。

議事堂に移ってからは黄金造りの御座所、本会議場、中央塔下のホール等を見学、午後5時30分に参会した。

グランティーの栃木旅行

三上紀史 (文化活動小委員会委員長)

ホスピタリティ委員会の文化活動小委員会は、宇都宮市のボランティア団体「ICCLA国際文化交流会」の協力を得て、1990年から米国人グランティーのみなさんのための栃木旅行を行っております。これはグランティーのみなさん

に、日本の地方文化を知っていただく機会を提供する目的で計画されたものです。昨年11月2日から4日にかけて2泊3日の旅行を行いました。

この旅行は過去の参加者の中で好評でしたので、昨年は過去の参加者のコメントを添えて案内を出しました。そのせいもあってか、グランティーの参加者は過去最高の24名(家族を含む)でした。栃木県内での活動の手配と世話はICCLA会のみなさんにおまかせしました。

第1日目の朝は、宇都宮市立東小学校を訪問し、授業参観・小学生とのフォークダンスなどを楽しみました。そのあと宇都宮市長を表敬訪問し、市長からは、グランティーとその家族の一人一人に名誉市民証が贈られました。宿泊はICCLA会のみなさんの家庭にホームステイしました。

2日目は、益子方面を旅行し、益子焼きや藍染の工場を見学、そのあと、日産自動車栃木工場を訪問しました。3日目は、日光方面を旅行し、日光東照宮、華厳の滝などを見学しました。

どの訪問先もグランティーのみなさんの間で好評でした。特に、日本の家庭にホームステイした経験は日本滞在中の最も楽しい思い出となった、という感想をもらったグランティーが多かったようです。同窓会からは、この旅行の第1日目を私が、第2日目を野中忍氏が同行いたしました。

1994 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST

NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT DONOR
GRADUATE RESEARCH FELLOWS - Graduate Students (5)		
Mr. BOBERG, Peter J.	Labor Economics	Fuji Bank
Ms. BURNS, Katherine G.	International Relations	Industrial Bank of Japan
Ms. KANESHIRO, Edith M.	Japanese History	Japan Economic Foundation
Mr. OSHIMA, Ken T.	Urban & Regional Planning	Mitsubishi Group
Mr. RATLIFF, John M.	Sociology	Komatsu
FULBRIGHT FELLOWS - Recent B.A.s (9)		
Mr. BILBREY, Bryan A.	Computer Engineering	Toyota
Mr. DUKE, Jon D.	Japanese History	Sumitomo Group
Ms. FOX, Ann M.	Philosophy	YKK
Ms. KIM, Sharon C.	Political Science	Japan Economic Foundation
Mr. METZGER, Matthew D.	Comparative Literature	Shino Shoten
Mr. PROVENCAL, Leo P.	Environmental Studies	Kyushu Alumni Fund
Mr. SEGAL, Neil A.	Public Health	Dainippon Inc & Chemicals
Ms. THOMAS, Christine N.	Japanese Literature	Japan Economic Foundation
Mr. WAGNER, Joshua B.	Political Science	Japan Economic Foundation
GRADUATE STUDENTS - Japanese (3)		
Mr. FUJIKAWA, Yoshinori	Comparative Culture	Cargil North Asia
Ms. KADA, Naoko	Environmental Issues	Mobil Sekiyu
Ms. SHIBUYA, Megumi	Anthropology of Education	YKK

1995 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST

NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT DONOR
GRADUATE RESEARCH FELLOWS - Graduate Students (5)		
Ms. MADGE, Leila	Cultural Anthropology	Japan Economic Foundation
Mr. PLATT, Brian W.	Japanese History	Fuji Bank
Ms. SMITH, Christienne L.	Japanese History	Kyushu Alumni Fund
Mr. TALCOTT, Paul D.	Government & Political Science	Industrial Bank of Japan
Ms. WENDER, Melissa L.	Japanese Literature	Shino Shoten
FULBRIGHT FELLOWS - Recent B.A.s (10)		
Ms. BOOMER, Ellen M.	Higher Education	YKK
Ms. CHASE, Katherine E.	Japanese Literature	General Alumni Fund
Ms. COOPER, Lara J.	Comparison of Legal Systems	Kyushu Alumni Fund
Ms. ISHIGURO, Jennifer Y.	Comparative Literature	General Alumni Fund
Mr. MACCANN, Henry N.	Japanese History	Japan Economic Foundation
Ms. MARTIN, Elizabeth A.	Public Administration & Policy	Japan Economic Foundation
Mr. ROSENBERG, Scott A.	Computer & Information Science	Toyota
Mr. SCHEERER, Jay W.	Political Science, General	Mitsubishi Group
Ms. SCOTTO, Sophia M.	Environmental Studies	Sumitomo Group
Ms. YUN, June K.	Education, General	Japan Economic Foundation
GRADUATE STUDENTS - Japanese (3)		
Mr. ISHII, Hiroaki	Ecology	Mobil Sekiyu
Ms. OHASHI, Rie	Intercultural Communication	Cargil North Asia
Ms. SAWADA, Misa	Diplomatic History	YKK